

水神様の湧水 環境復元プロジェクト (仮称)

—かつての湧水の姿を取り戻すために—

子安神社が管理する水神様の湧水は、200年以上の歴史もあり、市街地にあつて大変貴重な湧水です。しかしながら、現在の湧水の環境は本来あるべき水草が一本も生えておらず、多く生息しているはずのトンボのヤゴなどの水棲昆虫の姿も全くありません。一方、投棄されたと思われる要注意外来生物のミシシippアカミミガメ (ミドリガメ) や外来のコイが多く生息しています。

8月21日、神奈川県立生命の星・地球博物館の主任学芸員苅部治紀さんに現場を見ていただき、子安神社の湧水を管理する田口さんと向上高校生物部員と共に、今後の環境回復について具体的にアドバイスをいただきました。苅部さんからのアドバイスは以下の通りです。

- ①この湧水は古い歴史もあり、周りが開発された中で大変貴重である。
- ②一方、投棄されたカメとコイのために水草、水棲昆虫が全く見られず大変ゆがんだ環境である。
今後の環境回復のためには、
- ③かつてこの湧水がどんな環境であったか、どんな生物が生息していたか、詳しく調べること。
- ④ミシシippアカミミガメやコイを他に移し、環境をリセットすること。
- ⑤かつての湧水の姿を復活するために、水草等最小限の生物を同一水系から導入すること。

現在、向上高校生物部では湧水の環境調査、生息生物調査、環境回復の妨げとなるカメやコイの捕獲をしています。また、田口さんを中心として地元の方でかつての湧水の再現図作成や湧水量確保のための対策等を検討しています。

近い将来、子安神社周辺の地元の方と向上高校に通う高校生が協力して、歴史ある水神様の湧水の環境が少しでもかつての姿を取り戻すことができたらと考えています。

ミシシippアカミミガメやコイは、環境に悪影響があるの？

アカミミガメ (*Trachemys scripta*) ●原産地 アメリカ合衆国から南米大陸北西部まで

幼体 (ミドリガメ) はペット用として大量に流通しており、年間の輸入量は数十万から百万匹と推定される。飼育は容易であるが、大型に成長し攻撃的になるため、飽きられたり持て余されたりしやすく、大量の遺棄が続いている。1975年頃のサルモネラの感染報道がなされた際にまとまった遺棄が起こったと言われる。

雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫や水鳥の死体などを広く摂食する。

繁殖能力が高く、頑健で汚染にも強く、都市部のきわめて汚れた河川でも生存できる。

環境省では、ミシシippアカミミガメを特定外来生物に指定すべきか、検討されている。



コイ (*Cyprinus carpio*)

コイ目・コイ科に分類される魚。流れが緩やかな川や池などに生息する淡水魚である。飼育されたり養殖されてきた系統の個体は体高が高く、動きも遅いが、野生の個体は体高が低く細身な体つきで、動きもわりあい速い。コイの歯は、咽喉歯と呼ばれ、この歯の力は強力で、コインを折り曲げる程の力を持ち、タニシやシジミの殻も簡単に砕いて食べる事ができる。

食性は雑食性で、水草、貝類、ミミズ、昆虫類、甲殻類、他の魚の卵や小魚など、口に入るものならたいていなんでも食べるほどの悪食である。口に歯はないが、のどに咽頭歯という歯があり、これで硬い貝殻なども砕き割つてのみこむ。

市街地の汚れた河川を上から眺めれば、ボラと放流されたコイばかりが目につくということが多々ある。しかも コイは各種水生生物を食欲に食べてしまうので、往々にして河川環境の単純化を招きかねない。生物多様性の観点からすれば、もともとコイがいない水域にコイを放流するのは有害ですらある、という意見もある。これは、生物界における一般的な基準からすると、他の生物の嫌う水質の悪い水域にしか生息できないことを意味する。実際、逆に水質がよい小川の堰の内部に放流したニシキゴイが餌の問題から大量に餓死する例も報告されており、「コイが棲める＝きれいな水域」という図式は成立し得ないことがわかる。

コイヘルペスウイルスは、コイヘルペスウイルスが原因となる病気で、発病した場合の致死率は100%である。なお、人体への影響はないが、コイの移動、放流は行うべきではない。

